

先日、久しぶりに美術館めぐりのため上京した。一泊二日の短い滞在だったが、原美術館、国立新美術館、代官山ヒルサイド、東京都庭園美術館と内容の濃い展示会を観ることができた。

品川の原美術館の「アート・スコープ2007-2008」展は、具出身でニューヨークを拠点に活躍中の美術家・照屋勇賢氏が参加していた。第一室に展示されたコンセプトチャルな照屋氏のインスタレーションの作品はひととき、異彩を放っていた。特に、



## 上原 誠勇

## 視線

## おきなわ美術コラム

刺し身包丁七本を白い壁に鋭く突き刺し、その柄にオオゴマダラの孵化したサナギを付けた「DAWN」(夜明け)作品はインパクトがあった。通り魔事件など、暴力が氾濫する危うい社会を想起させ、「命の尊厳」を鮮やかに浮上させる優れた作品だった。

奥には奈良美智の常設展示室があった。照屋と奈良は、批判性において共通基盤があるとみるが、現れ方(テーマ)は対極だと思えた。地球規模の環境問題、国家が肯定する戦争、弱者に襲いかかる無意識の暴力など、照屋のテーマと明解な切り口はさえわたっている。一方、奈良は日本のアニメやオタク文化を象徴するかのように、同位相の

## 芸術の崇高さ感じる

アニメの描法でキャラのかわい少女が、大人社会を強烈に皮肉る。それぞれの立ち位置が印象深く残った。

六本木の国立新美術館は北京オリンピックの開催に合わせたのだろうか、中国一九八〇年以降の現代美術「アバンギャルド・チャイナ」展を観ることができた。

受けた。絵画では、十数年前に沖縄県が購入した、方力鈞の二作品が展示されていた。絵の下方に「沖縄県立博物館・美術館蔵」のキャプションを見て、少し誇らしく思った。

照屋勇賢の「さかさまの日の丸」を展示した代官山ヒルサイドの「アトミック・サンシャインの中へ」展、沖縄県立美術館建設室のアドバイザーを務めた塩田純一氏キュレーションによる、東京都庭園美術館の舟越桂「夏の邸宅」展も観た。見応えのある味わい深いものだった。アールデコの館内に凛とした幻想的な舟越の作品群。あの深い思索と眼差しの彼方に「美術の力」「芸術の崇高さ」をあらためて知らされた。

共産主義体制の中から、不気味で力強く、グロテスクでシニカルに社会を批判、揶揄する作品が多く、多様な表現展開があった。美術専門誌などでも知られる、両性具有の馬六明のパフォーマンス、サディスティックな張洄、彼らのビデオアートの実作品に接すると、頭をハンマーで叩かれるような強烈なショックを